

変化・変態考

当初（当書）序文に「当然、変えてはならない所や、変えるべきではない所があるのも事実であるが、何も変えない、変えられないでは・・・」と述べたが、ふと自分自身に置換えて考えると、言行不一致のような気がしてならない。そこで、まずは「変化・変態」とは何なのかと、少し深掘りして考えてみた。思い付きもあるので、その点をご容赦を。

この項で考察する変化とは、自分自身または組織の社会行動や日常生活の何かを変化（改善）させる行為・行動について言及する。また、変態については人間および組織の社会的進化の観点からの行為・行動（態度を変える）についてのみ述べることにし、社会的に受け入れられない異常・変質的な行為・行動の「変態」について述べるものではない。

そもそも「変化・変態」にはザックリ2つの形態があるように思える。一つは現状をより良くするための「攻めの変化・変態」、もう一つは、外的環境の変化に対応する悪くならない様にするための「守りの変化・変態」に分類され得るのであろう。外的環境も変化するし向上心もあるので、両者複合の「攻防の変化・変態」も当然あり得る。また、その攻防の割合や、力の入れ具合（大きく～僅かに変化・変態する・させる）の違いもあり、一概に種類を限定できないことより、ザックリ2つの形態にやむを得ず分類した。

何れにしても、「変化・変態」を実践・実行しない・できないことは、「座して死を待つ」を暗に示唆していないか。人間としてあるべき姿を恒常的に変化・変態すべきではないし、正しい目標や目的に進む努力には、変化・変態する余地は全くない。闇雲に「変化・変態」を促すのではないが、「変化・変態」の拒絶は終わりの始まりの予感がする。

変化・変態を構成する3大要素は大雑把に「何を」「何に」「どうやって」に分類されるのであろう。何れも欠けると変化・変態が成就されない重要な要素である。

「何を」：先ず変化・変態の対象が見つからないと何も起こらない。動機やトリガーに相当する。外的環境が全く変化しない状況下では、変化・変態する動機は無いし、それでよしとするのであれば、変化・変態がむしろマイナスに作用する可能性もあり得る。しかし外的環境が大きく変動している状況下においては、現状維持や停滞は、将来の滅亡への道を辿ること必至である。ダーウィンの進化論ではないが、外的環境の変化に対応・適応したもののみが生き残り、以外は滅亡の道を辿ると考えるのは自然である。ただし、「何を」を見誤るとこれも滅亡の道を辿ることになる。大変難しいが当然でもある。

「何に」：一般的に「現状とあるべき姿の差異が問題である」と言われている。その「あるべき姿」が「何に」に相当する。ただし、変化・変態が成就するのは、その「あるべき姿」が真であるときに限る。しかしながら「やってみないと分からない」が正解であり、その真偽が判断可能なものは直に実践されているか却下されて、もう既に変化・変態というべきものではなくなくなってしまっている。もし、真が2つ以上見つかった場合は、迷う。しかし、どれも真であるから、一つに絞るもよし、分化するもよし。分岐した道が合流する例もある。何れにしても「真のあるべき姿」を見つけ確信し進むしかない。なぜなら、結果は分らないから。長考で停滞している間に状況がさらに悪化する例もある。

「どうやって」：これは一言こうあるべきの指針はない。ケースバイケースを一言で述べることはできないが正確なところ。したがって、ここでは変化・変態の行動・実践の阻害要因の一つ「リスク」について述べる。リスクを少しでも察知すると二の足を踏むのは、自然・当然の心理である。しかしその計測は困難（やってみないと分からない）である。羽生名人（王位・王座・棋聖）（執筆当時）が自身の著作や対談で「全くリスクを取らないのは最大のリスクになる」と述べ、ビル・ゲイツ氏が「リスクを負わないのがリスク」とWeb上数多の紹介がある。評価の基準が経済性≧社会性の現世では、リスク回避の焦点が圧倒的に経済性へ向けられている。真はそれらの逆であるはずであるが、誰もそれらを指摘はしない。それらが人間界進化の阻害要因にならないようにと祈るのみである。